

ホメロスの世界観

——『イリアス』におけるアテネとアポロンの対立を巡って——

山形 直子

The Open University 西洋古典学教授

1. はじめに

ホメロスの叙事詩『イリアス』は、英雄アキレウスの怒りに始まる人間のドラマと人間界の戦争を中心に展開する。そのため読者の視点はしばしば地上の人間世界に集中しがちなところがある。しかしホメロスの視界は詩の女神ムーサの靈感のおかげで世界のどこへでも広がることができ、地上を二次元的に移動する人間の動きだけでなく、天地の間を自由に行き来する神々の動きも描写することができる。そこで特に神々の動き・活動に焦点を絞ってみると、ホメロスの描く世界の構造や全体像がよりはっきり見えてくるのではないかということが期待される。そうやって神々の動きを追いながらホメロスの宇宙の「地図」をなぞってみたい、というのがこのプロジェクトの出発点である。そうして調べてみると、宇宙の支配者としての主神ゼウスの動きと共に、いわばその右腕、左腕の役割を果たす娘アテネ、息子アポロンの動きが物語の進展に大きな影響を及ぼしていることも明らかになってくる。これを調査するのが本稿の主目的である。

はじめに『イリアス』における世界の縮図とも言える、そしてしばしば「小宇宙」(microcosm) と称されてきた¹、鍛冶の神ヘパイストスを作るアキレウスの楯の描写を見てみたい(18.483-608)。円形の楯の装飾が中央の丸い突起の周囲から外へ向かって広がる一連の輪のなかに作り出されていく過程が想定されていると思われるが、その場面のテーマを以下のように要約することができる。

¹ アキレウスの楯を小宇宙と称することについては Taplin (1980), Alden (2011) 796, Nagy (2003), 72 を参照。楯に描かれた場面と『イリアス』の中の物語との対応については Alden (2000), 48-73 及び Yamagata (2023) 参照。

表 (1) アキレウスの楯

(1) 大地、天、海	483-489
(2) 平和な町	490-508
(3) 戦争中の町	509-540
(4) 牛の引く鋤で耕す畑 (春)	541-549
(5) 麦の収穫 (夏)	550-560
(6) 葡萄の収穫 (秋)	561-572
(7) 牛 (冬)	573-586
(8) 羊 (冬)	587-589
(9) 舞踏	590-606
(10) オケアノス	607-608

楯の装飾は、大地、天空、海を中心に始まり、平和な町、戦争中の町、町の外の田園地帯をその外側に描き、畑地の耕作、麦の収穫、葡萄の収穫、牛や羊の放牧などの農業活動の情景を描き出す。一番外側には世界を取り囲む大河オケアノスの流れが描かれ、それと対応するように一番内側の場面の描写もオケアノスで終わっている (489)。また、2 番目の輪のなかの平和な街では人々が結婚式を祝う場面があり、それと対照するように楯の最後から 2 番目の場面では若い男女が踊る姿が描かれる。この楯の中心の場面 (18.483-489) にズームインすると、この世界のイメージをおおざっぱに捉えることができる。

『イリアス』 18.483-489:²

ἐν μὲν γαῖαν ἔτευξ', ἐν δ' οὐρανόν, ἐν δὲ θάλασσαν,
 ἡέλιόν τ' ἀκάμαντα σελήνην τε πλήθουσιν,
 ἐν δὲ τὰ τεῖρεα πάντα, τὰ τ' οὐρανὸς ἐστεφάνωται,
 Πληϊάδας θ' Ὑάδας τε τό τε σθένης Ὠρίωνος
 Ἄρκτον θ', ἣν καὶ Ἄμαξαν ἐπὶ κλησὶν καλέουσιν,
 ἢ τ' αὐτοῦ στρέφεται καὶ τ' Ὠρίωνα δοκεύει,
 οἷη δ' ἄμμορός ἐστι λοετρῶν Ὠκεανοῖο.

そこには大地あり天空あり海がある。
 疲れを知らぬ陽があり、満ちゆく月、

² 以下『イリアス』訳は松平 (1992) より引用する。

また天空を彩る星座がすべて描かれている—
すばる（プレイアデス）に雨星（ヒュアデス）、さらに力強いオリオン、
また「熊」座、これは別の名を「車」座ともいい、
同じ場所を廻りオリオンをじっと窺っている。
この星のみはオケアノスの流れに浸かることがない。

大地と空と海、そして大地を囲むオケアノスが列挙されている。これは、大熊座、子熊座が夜空に見える北半球にいる限り、地球上の人間でも見ることができる情景である³。しかし、これはホメロスの宇宙の完全な地図と言えるであろうか。と言うのは、『イリアス』15.189-193において、ホメロスの宇宙の構造が別の視点から示されているからである。その箇所ではポセイドンが、ゼウス、ハデス、そして自分自身の三兄弟が、どのように世界をくじ引きで分割したかを描写している。

『イリアス』15.189-193:

τριχθα δὲ πάντα δέδασται, ἕκαστος δ' ἔμμορε τιμῆς·
ἦτοι ἐγὼν ἔλαχον πολλὴν ἄλα ναιέμεν αἰεὶ
παλλομένων, Αἴδης δ' ἔλαχε ζόφον ἡρόεντα,
Ζεὺς δ' ἔλαχ' οὐρανὸν εὐρὺν ἐν αἰθέρι καὶ νεφέλῃσι·
γαῖα δ' ἐπὶ ξυνὴ πάντων καὶ μακρὸς Ὀλύμπος.

全世界は三つに分割され、兄弟がおのおのそれぞれの権能を割り当てられた。
籤^{くじ}を引いてわたしは灰色の海にいついつまでも住むことになり、
アイデスは暗々たる闇の世界を、
ゼウスは高天と雲の漂う広大な天空を得た。
そのほかに大地と高峰オリュンポスとは、われら三神に共通のものとなった。

この説明によると、ゼウスには天空、ポセイドンには海、ハデス（アイデス）には冥界が割り当てられ、大地とオリュンポスは共有ということになっている。さらに『イリアス』のあちこちを見回すと、1.592-593ではヘパイストスがオリュンポスからレムノス島へ落ちるのに丸一日かかったと言われる一方、8.13-16では冥府（ハデス）とそのさらに下にあるタルタロスの距離が、天から大地への距離と同じだと説明されていて、天空、大地、地下世界の間の距離もそこから読み取ることができる。こうしたところがホメロスの世界のざっとした枠組

³ あるいは水島(2019) 421の言うように、これは「神々の座オリュンポスから見下ろされる世界」とも解釈できる。

みと言えるだろう。次にはこれを念頭において、『イリアス』の神々の動きを追ってホメロス世界のスケッチをしてみたい。

2. 神々の活動領域

まず、『イリアス』における神々の動きの概要を表(2)にまとめてみた。これは、主だった15人の神々と、グループとして言及される、テティスの姉妹である海の女神ネレイデス達、及び「すべての神々」の位置と動きを要約したものである。ここでは神々の動きと活動領域の広がりを見視化するのが主目的なので、冥界にいて動かない神々、例えばクロノス、エリニュエス、ペルセポネ（デメテル神話の中では一年の一部を地上で過ごすことになっているが、『イリアス』ではそれは言及されない）は含めない。また河神クサントス（スカマンドロス）やシモエイス、眠りの神、死の神など、出番が少なく一領域に動きが限られている神々も含めていない。神々の動きを記録するに際しては、例えばテティスがペレウスと暮らしていたのは、『イリアス』内部の出来事から言うとは過去のことになるが、そういうクロノロジーは一切無視して、神々が過去、現在、未来において取る行動を語りの中に出てきた順にそのまま記した。それによって『イリアス』の世界の構造とその中で交錯する神々の活動のネットワークを見視化しようという試みである。また参考のため、『オデュッセイア』やホメロス風讃歌など、『イリアス』以外のテキストに出てくる逸話もいくつか角括弧にいれて挿入した。

表 (2) 『イリアス』[と他のテキスト] における神々の動き

名前	天上	地上	海辺	海	冥界
テティス	ゼウスと会う; ヘパイストスと会う	ペレウスの妻／ア キレウスの母とし てプティエに住む	アキレウスとアカイ ア人の船の側で会う	父、姉妹と ともに住む	ブリアレオス [アキレウスとス テュクス川へ]
ゼウス	オリュンポス 山とイダ山	トロイアの戦場; 人間との情事	船脇の戦いに干渉す る	オケアノス のほとり	(クロノスをタル タロスに落とす)
ヘレ	オリュンポス 山とイダ山	トロイアの戦場; ステントールの姿 を取る(第5巻)		オケアノス とテテュス と住む	(ステュクス川に かけて誓う 15.37)
アテネ	オリュンポス	トロイアの戦場; トロイアの神殿; ピュロス (11巻)	アカイア人の集会; 船脇の戦い (15巻); パトロクロスの葬送 競技		(ハデスの隠れ帽 子を被る 5.844- 845); ヘラクレス を助ける 8.367-9 [& <i>Od.</i> 11. 626]

アポロン	オリュンポス	トロイアの戦場; ペルガモス; アル キオネをさらう; ラオメドンの牛飼 い; ニオベの息子 たちを殺す	疫病を起こす; 船脇 の戦い; パトロクロ スの葬送競技; ヘク トルの遺体を守る		
ヘルメス	オリュンポス	トロイアの戦場; 人間との情事	アキレウスの陣屋へ プリアモスを送る		[ヘラクレスを助 ける <i>Od.</i> 11. 626; 冥界へ霊を導く <i>Od.</i> 24. 1-10]
ポセイドン	オリュンポス; サモトラケ	トロイアの戦場; トロイアの城壁を 作る; 大地を揺す る; ピュロス (11 巻); 人間との情事	戦後にアカイア人の 防壁を壊す; 船脇の 戦い (13-15 巻)	自分の領域	
ハデス	オリュンポス で治療 (5. 398-402)	[ペルセボネをさ らう]			自分の領域
イリス	オリュンポス	神々と人間の使 者; アプロディテ を救助する	アキレウスへの使者 (18 巻)	テティスへ の使者 (24 巻)	
ネレイデス	オリュンポス (20.5-9)		テティスと共にアカ イア人の陣地に行く	自宅	
ヘパイスト ス	オリュンポス	トロイアの戦場		テティスに 救われる	
ディオニュ ソス	オリュンポス (20.5-9)	リュクルゴスに迫 害される		テティスに 救われる	
エオス	毎朝空に昇る	[ティトノスと結 婚]		オケアノス から昇る	[息子メモノン を不死にする]
アプロディ テ	オリュンポス	トロイアの市と戦 場; イダ山中でア イネイアスを産む			
アレス	オリュンポス	トロイアの戦場; 人間との情事			(壺に閉じ込めら れ死にかける?)
アルテミス	オリュンポス	トロイアの戦場; ニオベの娘たちを 殺す			
「すべての 神々」	オリュンポス で神々の集会 (20.5-9)	ペレウスとテティ スの婚礼 (24.60- 63)		オケアノス のひとり	

表(2)の第一列目の天上は、事実上オリュンポス山またはイダ山を意味する。ただし「オリュンポス」という地名の曖昧さに注意する必要がある。というのは、この地名は雪をかぶった物理的な山として想像されることもあれば

(18.186、616)、神々が暮らす天界の代名詞ともなるからである(例えば 19.128 オリュンポスと星の輝く天空、5.750=8.394 広大な天とオリュンポス)⁴。この表を一見してわかるように、すべての神々がここに住むか、ないしはここにやって来る。普段はオリュンポスに住んでいない海の神やニンフたちも、20.5-9 でゼウスに召喚されたときにはそこに集まったことになっている。特に興味深いのはハデスのケースで、彼は普段は冥界に住んでいるが、過去にヘラクレスに傷つけられて癒しの神パイエオンによる治療が必要になったときにはオリュンポスへ出かけて行ったという(5.398-402)。

第二列目の地上は人間の住む世界であるが、ここもほとんどの神々が訪れている。24.60-63 では、「すべての神々」が人間界に属するペリオン山で行われたペレウスとテティスの結婚式に出席したことになっている⁵。他にも神々が過去に人間と持った(性的な)関係が至るところで言及される。さらにトロイアの平野での戦いには多くの神々が介入し、特にアテネとアポロンは戦闘に深く関わり、ひいきにしている英雄たちを助けるためにしばしば地上にやって来る。アテネはアカイア方、アポロンはトロイア方を応援しているため、時に対立する関係にあり、両者はまた第 23 巻のパトロクロスの葬送競技にも干渉する。この二神はゼウスの意向に従って行動しているはずなのだが、ゼウス自身も時によりアカイア勢、トロイア勢を交互に応援するのに対応して二神の関係にも変動がみられる。これをこの論考の後半でより詳しく見てみたい。

次に第三列目の海辺—これも神々が人間と交わる空間である。第 1 巻でアポロンはクリュセスの祈りに応えてアカイア人の陣営に疫病を引き起こし(1.43-53)、第 1 巻、第 2 巻でアテネはアカイア人の集会に介入し(1.194-222, 2.169-181)、第 24 巻でヘルメスはプリアモスをアキレウスの陣屋まで送って行く(24.440-468, 682-694)。そして第 1 巻(423-4)ではゼウスを含む「すべての神々」がオケアノスのそばに住むエチオピア人を訪れたことになっていて、これは彼らの海ないし海辺への訪問と見なすことができる⁶。

⁴ ちなみに『オデュッセイア』6.42-45 ではオリュンポスが風にも雨にも雪にも晒されず、雲一つない空に囲まれているとされている。オリュンポスと天がほぼ同義であることについては、Guthrie (1950) 206-208 を参照。

⁵ 結婚式の場所はホメロスでは直接言及されないが、『イリアス』19.390-391 でケイロンのペレウスへの結婚祝いであったアキレウスの槍の出どころとしてペリオン山が言及されている。

⁶ テティスがアキレウスに伝えるゼウスと他の「すべての」神々のエチオピア人訪問のエピソードが物語の進行とかみ合わないことについて古来論議が交わされて来ており、古注には神々は実際には現地に行かなかったのだという解釈もある。Scodel (2007) 84 参照。ただし『オデュッセイア』でもポセイドンの不在の理由がエチオピア人の供犠を受けるためとされており

ところで表(2)の第三列目の海辺、第四列目の海の項目を見ると、神々の中でも、さすがに海の神であるポセイドンとテティスの行動がここに頻繁に関わっていることが見て取れる。ポセイドンは内陸の戦場でも活躍し、例えば第 20 巻ではアイネイアスを救い (318-340)、第 21 巻では神々の戦い (テオマキア) に加わっているが、第 13 巻から第 15 巻にわたる長大なアカイア人の船脇での戦いに積極的に参加している神はポセイドンだけであり、ゼウスの言いつけでその戦いから退くときもオリュンポスではなく海に戻って行くことが注目される (15.219)。

それとは対照的にテティスは、海辺であろうと内陸であろうと全く戦場に行くことはない。彼女は確かにヘパイストスにアキレウスの新しい武具一式を作ってもらうためにオリュンポスへ出向くが、『イリアス』の中ではそれが彼女がアキレウスの命を守るために取る唯一の行動と言ってよい⁷。テティスの他の動きを見ると、彼女はオリュンポスのゼウスの館へ行くのも (24.90-91)、ペレウスと結婚して人間界に行くのも (18.434)、いやいやながらで、海の底にある父親の洞窟でしか落ち着けるところがないように見える (1.357-359、18.35-36)。

しかし彼女の主な活動はアカイア人の船が並ぶ海辺に集中していて、ここで息子のアキレウスと会い、彼の訴えに耳を傾け、一緒に涙を流し、ここから彼のためにゼウスやヘパイストスの援助を求めに出かけていく (1.419-427、18.136-137)。また、海辺でアキレウスと共にパトロクロスの死を嘆き、『オデュッセイア』にみられるように (24.47-92)、いずれアキレウス自身の葬儀もそこで行うことになる。Albinus が指摘するように葬儀を故人と生者の間の communion (交わり) と見なすことができるのであれば⁸、パトロクロスの葬儀に参加することによって (23.14)、テティスは他の神々が決してしない仕方で冥界の死者と交信していると見ることもできるかも知れない⁹。

第五列目の「冥界」は、そこに住むハデスを除けば、『イリアス』の神々が最も訪れることの少ない領域である。表(2)には、テティスがアキレウスをステュクス川に浸すことによって不死身にしようと試みた話など『イリアス』以

(1.22-23, 5.282-287)、同じ理由が『イリアス』23.205-206 でイリスが風の神の館でのもてなしを断る口実としても使われていることから、神々がエチオピア人を訪れることそれ自体はよくあることと見なされていたと考えられる。

⁷ 『アエティオピス』においてと異なり、『イリアス』のテティスはアキレウスのために不死を求めない。Edwards (1985)、Slatkin (1991) 27 (Slatkin (2011) 36 として再録) 参照。

⁸ Albinus (2000) 36.

⁹ 海岸を生者と死者の出会いの場として示すもう一つのエピソードは、アキレウスが夢の中でパトロクロスの幽霊と出会うエピソードである (23.65-101)。

外のテキストを通じて知られるいくつかの物語も角括弧に入れて含めた。テティスは『イリアス』や『オデュッセイア』の物語の筋の中では冥界を訪れないが、過去にはゼウスを助けるためにブリアレオスを連れてくるというエピソードがあり（『イリアス』1.401-406）、これは彼女がタルタロス（またはその門）を訪れた機会と考えることができよう。というのは、ヘシオドスが『神統記』734行で、ブリアレオスをギュエスとコットスと共にタルタロスの門番としてゐるからである。アキレウスをステュクス川の水に浸して不死身にしようとする彼女の試みは、Burgess¹⁰が指摘するようにローマ詩人のスタティウス（『アキレイド』1.133-134）における言及が現存最古になるが、『イリアス』18.188で彼が鎧なしでは戦いに参加できないと言っていることから、『イリアス』がそんな伝説を下敷きにしていないことは明らかである。反対に彼女はいつも短命に生まれついた息子のために嘆き、さらに、『イリアス』の冒頭（1.3-4）で言われているように、アキレウスの怒りがアカイア人や敵の多くをハデスに送り込むことになり（そしてそれはそもそもテティスのゼウスへの嘆願のおかげであり）、いろいろな意味で彼女はアキレウスを通じてハデスとつながっていると言える¹¹。ちなみに表(2)でテティスを最初に挙げたのはこの女神が神々の中でも唯一、天上、地上、海辺、海中、冥界すべての領域に足を運んでいて、その動きが『イリアス』の物語の展開の中心軸をなしていると言ってもいいと思えるからである¹²。

3. ゼウス

テティスに並んで物語の展開を推し進めているのは言うまでもなく、主神のゼウスである。ゼウスの動きをまとめた表(3)を見ると、彼は基本的に天界に留まっているが、オリュンポスとイダの間を移動していることが分かる。そしてトロイア勢の味方をするときは「地元」のイダ山に行っていることが多い¹³。

¹⁰ ホメロス以外の伝統においてテティスがアキレウスを守ろうとする試みは Burgess (1995) 217-224 に詳しい。彼はテティスがアキレウスをステュクス川に浸したという伝説はヘレニズム時代に始まったと主張しているが、現存の文学ではスタティウスが初出である(237-240)。Burgess (2009) 8-11 も参照。

¹¹ Dova (2012) 102 参照。ここでは『イリアス』9.158 でアガメムノンがアキレウスをハデスに喻えたことにも言及している。

¹² これについては Yamagata (2020)を参照。

¹³ Clay (2011) 952; Taplin (1992) 141.

表 (3) ゼウスの動き

巻数	天上 (オリュンポス山／イダ山)	地上	海辺	海	冥界
1	テティスと密談; 夢を送る; ヘパイストスを投げ下ろす			オケアノスのほとりにエティオピア人を訪ねる	
2	夢、噂、雲、蛇の予兆を送る; 雷鳴に喜ぶ; イダ山から下界を見渡す	ペイリトオスの父となる; 大地に雷を落とす			
3	イダ山から下界を見渡す				
4	アテネ、流れ星、予兆を送り出す				
5	勝利を与える; 山頂を雲で覆う; サルペドンを守る	ガニュメデスをさらう			
6	グラウコスの判断を狂わせる	サルペドンの父となる			
7	イダ山から下界を見渡す; 夜間に雷を鳴らす				
8	オリュンポスの集会; イダから雷を落とす; 鷲を送り出す; ヘラクレスを助けにアテネを送る; テティスと				(他の神々をタルタロスに落とせる)
9	雷光をヘクトルの吉兆として放つ				「地下のゼウス」
10					
11	争いの女神エリスを送る; 血の雨を降らす; イダ山に行く; イリスを送り出す; アイアスに恐怖を起こす				
12	戦後に雨でアカイア人の防壁を壊す; サルペドンとヘクトルを援助				
13	ヘクトルを援助; テティスと	ミノスの父となる			
14	イダ山頂	人間の女との情事			(クロノスをタルタロスに落とす)
15	イダ山; イリスをポセイドンに遣わす; アポロンをヘクトルに送る; テティスと; 手でヘクトルの後押しをする (610-11)				
16	血の雨を降らす; アポロンにサルペドンの遺体を救い出させる	ドドナの神として			
17	霧でパトロクロスの遺体を保護する; 雷を落とす; アイアスのために霧を晴らす				
18					
19	アーテーを投げ下ろす; アテネをアキレウスに遣わす; 神々の集会				

20	雷を落とす	ダルダノスの父となる; ガニユメデスをさらう			
21	オリュンポスから神々の戦いを見る				
22	黄金の秤				
23					
24	イリス、鷲、ヘルメスを送り出す; テティスをオリュンポスに呼び出す				

ゼウスは、雷電 (2.781-83, 7.478-79, 8.75-76, 133-34, 9.237, 13.242-44, 14.417, 15.377-79, 17.595, 20.56-57)、雨 (5.91, 10.5-6, 11.53-54, 12.25-26, 16.364-66, 384-92, 459)、夢 (1.63, 2.6-16, 26, 63)、噂 (2.93)、さらにアテネ (4.69-72, 5.765-66, 8.365, 19.341-51)、アポロン (15.220-35, 16.664-76)、争いの女神エリス (11.3)、神々の使者であるイリス (11.185-95, 15.157-68, 24.77) およびヘルメス (24.333-39)、テティス (24.112-19) などの他の神々を送り、出来事を進行させる。ゼウス自身の位置はオリュンポスとイダの間の移動を除けば固定しているかもしれないが、この神の影響はその武器である雷電と彼の代理者、特にアテネとアポロンを通じて、地上と海、さらには地下世界にまで及ぶ。そして過去には自分の父クロノスをタルタロスに追放し (14.203-204)、自分に歯向かう他の神に対しても同じことをするぞと脅迫している (8.13-16)。ゼウスが鎮座するオリュンポスは、宇宙的な「ウェブ」の中心と言えるであろう。

4. アテネとアポロン

そのゼウスの右腕、左腕とも言うべきアテネとアポロンの動きを表 (4) と表 (5) にまとめた。地上の列を一見するだけでも、この二神が忙しく地上を行き来している様子が窺えよう。

表 (4) アテネの動き

巻数	天上 (オリュンポス山)	地上	海辺	海	冥界
1	オリュンポス		アキレウスに姿を現す	オケアノスの側にエチオピア人を訪ねる	
2	オリュンポス	アカイア勢を励ます; エレクテウスを育てる	アカイア人の集会		

3		メネラオスを助けたと思われる			
4	オリュンポス	パンダロスをそそのかす; アカイア勢を援助			
5	オリュンポス	ディオメデスと他のアカイア人を援助			ハデスの隠れ帽子を被る(5. 844-845)
6		(トロイアの女達の祈りを退ける)			
7	オリュンポス	アポロンと一緒に禿鷹の姿で観戦			
8	オリュンポス; 神々の集会				ヘラクレスを助ける(8.367-69)
9					
10		アカイア勢を援助			
11	オリュンポス; 雷を送る	オデュッセウスの傷を軽くする			
12					
13					
14					
15	オリュンポス	アカイア人の目から霞を取り除く			
16					
17		アカイア勢を励ます			
18			アキレウスを援助		
19			ネクトルとアンブロシアでアキレウスの空腹を満たす		
20		神々の戦い; 戦場にて			
21		神々の戦い; アキレウスとアカイア勢を援助			
22	オリュンポス	アキレウスがヘクトルを倒すのを助ける			
23			パトロクロスの葬送 競技でお気に入り を助ける		
24	オリュンポス	ペレウスとテティスの婚礼に出席			

表 (5) アポロンの動き

巻数	天上 (オリュンポ ス山／イダ山)	地上	海辺	海	冥界
1	オリュンポス; 豎琴を弾く		疫病を起こし、後に鎮める	オケアノスの側にエチオピア人を訪ねる	
2		エウメロスの馬を飼育する; パンダロスに弓を与える			
3					
4		ペルガモスからトロイア人を励ます			
5		アイネイアスとトロイア勢を援助する; ペルガモスに戻る			
6					
7		ペルガモスからアテネの姿を見つける; アテネと秃鷹の姿で観戦する; ヘクトルを援助する			
8	(神々の集会)	ヘクトルを援助する			
9		アルキュオネをさらう			
10		ヒッポコオンを起こす			
11					
12		戦後にアカイア人の城壁を壊す			
13					
14					
15	イダ山でゼウスに会う	ヘクトルとプリュダマスを援助; 戦後にアカイア人の城壁を壊す			
16		グラウコスを援助; サルペドンの遺体に付き添う; パトロクロスの武装を解除			
17		トロイア人を援助			
18					
19					
20		神々の戦い; 戦場に留まる			
21		神々の戦い; ラオメドンの牛を飼う; 戦場でトロイア勢を援助			

22		ヘクトルを援助			
23		アエネアスを救う	ヘクトルの遺体を守る; パトロクロスの 葬送競技に干渉する		
24	オリュンポスにおける神々の集会	ペレウスとテティスの 婚礼で豎琴を弾く; ニ オベの息子たちを殺す	ヘクトルの遺体を守る		

先にも述べたように、アテネはアカイア勢、アポロンはトロイア勢を援助し、それぞれのひいきの英雄たちを助けるために地上に赴き、しばしば対立する。二神ともゼウスの意向に従って行動しているが、ゼウス自身が時によりアカイア勢を支持したり、トロイア勢を支持したりと意向を変えるのに応じて二神の行動にも変化が生じる。

アテネとアポロンの対照をなす活動は第 1 巻から始まっている。アキレウスの怒りによって多くの武者が倒され、それによって「ゼウスの計画」(βουλή)が達せられていった、という語り出しに続いて (1.1-5)、その怒りの元となった争いを起こしたのはそもそも「レトとゼウスの息子 (アポロン) であった」(9)と言われ、アガ멤ノンがアポロンの祭司クリュセスを侮辱し、それに怒った神がアカイア軍に疫病を送り込むというエピソード (1.43-53) が続く。つまり『イリアス』の物語のきっかけを作ったのはアポロンであること、そしてその背後にはアポロンの父であり、事の成り行きをあらかじめ計画したゼウスの存在がある、ということが明らかにされる。そしてアキレウスとアガ멤ノンの喧嘩が始まり、あわやアキレウスがアガ멤ノンに切りかかろうとするところへ、アテネが天から (οὐρανόθεν 195) やって来て引き留める。そしてその背後には、アカイア勢を後押ししているゼウスの妃ヘレがいる (195-196)。ここではアポロンもアテネも「オリュンポスの峰」(44) ないし「天」(195) から人間界に降りて来たとされ、二神の動きはその面では対称 (シンメトリー) を成している。

第 1 巻の終わりではゼウスがテティスにした約束によってゼウスとヘレの間に不和が生じるが (536-567)、ヘパイストスの執り成しで神々の集いは再び和やかになり、アポロンは豎琴を弾き、ムーサイが歌って (603-604) 楽しく夕べが終わる。ここではオリュンポスに居を構えて他の神々と仲良く暮らしているアポロンの姿が描かれていると言える。しかし、表(5)を一見すれば分かるように、我々読者が次にアポロンの姿をオリュンポスに見る機会は、この叙事詩の最後の第 24 巻まで待たなくてはならない。これは、表(4)に見られるように、

盛んに父神ゼウスまたはその妃のヘレと会話を交わし、しばしばそのどちらかの指示を受けてオリュンポスから地上へ飛んで行くアテネの動きとは対照的である。

第 2 巻では、アガ멤ノンの失態でアカイア軍が混乱に陥りトロイアからあわや退却しそうになった時、アテネはヘレの命令によりオリュンポスの頂から飛び降り（156-157）オデュッセウスを動かして全軍を落ち着かせる。そしてアカイア軍が隊列を整え始めると、女神はゼウスの権威の象徴であるアイギスを身に着けてアカイア勢を励まして歩く（446-452）。一方この巻ではアポロンは、過去にトロイア人に施した恩恵を通じて言及される（766 エウメロスに馬を与えた、827 パンダロスに弓を与えた）。ここではアテネとアポロンが味方するアカイア、トロイアそれぞれの軍への影響が間接的に表現されていると言えよう。

第 3 巻ではアテネ、アポロン共に語りに直接には介入しない。ただメネラオスとの対戦を逃れて来たパリスが、アテネがメネラオスに勝利を与えたと言っているが（439）、そう思っているだけで、実は自分がアプロディテに救出されたということも悟っていない（374-376）。

第 4 巻はオリュンポスにおけるゼウスとヘレ、アテネの会話で始まり、ヘレの勧めでゼウスがアテネを地上に向かわせ、トロイア方が停戦の誓約を破るように仕向けさせる（68-74）。アテネはパンダロスをけしかけてメネラオスに矢を射かけさせる一方で（86-104）、眠っている子供からハエを追い払う母親のようにその矢をそらせてメネラオスの傷を軽くする（128-140）。戦いが再開するとまずアレスがトロイア勢、アテネがアカイア勢を激励する（439）。それから 4.507-513 に至って、自分の神殿のある（5.446）トロイア城内の砦ペルガモスから様子を見ていたアポロンがトロイア方を励ますと、それに対抗してアテネもアカイア勢を励ます（4.514-515）。ここに至って初めてアポロンがペルガモスを拠点にしていたことが分かるのである。

第 5 巻はディオメデスのアリスティア（武勇譚）の段であり、アテネがディオメデスに力と勇気を授けてトロイア方の神々であるアレスとアプロディテに対抗させる巻である。そのためアテネとアポロンの競争関係は表面に出ないが、アポロンも、アプロディテが救出しそこなった息子のアイネイアスを代わって黒雲で隠して守ってやったりしている（344-346）。そうやってアイネイアスがアポロンの庇護を受けていることが分かっているが、ディオメデスがアイネイアスにさらに襲いかかろうとすると、アポロンは三度彼を押し返し、四度目には大声で叱って彼を退け（440-442）、アイネイアスをペルガモスへ救い出す

(445-446)。さらにアレスをけしかけてディオメデスに向かわせてから (454-460) ペルガモスに戻り、アテネが戦場から去った (510-511) のを見届けてからアイネイアスに力を与えて再び戦場に送り出す (512-514)。しかし、後にはヘレがゼウスの同意を得て、アテネを再び戦場に送り出してアレスに対抗させ (711-754)、アテネはディオメデスの槍をアレスに打ち込んで怪我をさせて退却させてから (856-857)、オリュンポスへ戻る (907-908)。

第 6 巻ではアポロンと同じようにアテネもトロイアの城内に神殿を持っていることが明らかになる¹⁴。王妃ヘカベに率いられたトロイアの女達が、女神の神殿で奉納品の衣と祈りを捧げ、牛 12 頭の犠牲も約束するが、アテネはその祈りを聞き入れない (301-311)。その折、女神自身はオリュンポスにいと想像されよう。

第 7 巻ではオリュンポスから飛び降りたアテネ (17-20) とペルガモスからやって来たアポロン (20-21) が初めて直に対決するが、二神は話し合いの上、両軍に一日の休戦をもたらすことを決めて、それぞれ禿鷹の姿になって「アイギスを持つ父神ゼウス」の聖なる櫨の木の上にとまって、ヘクトルや他の武者たちの様子を楽し気に眺める (58-61)。普段はライバルのような二人がゼウスの聖木に仲良く座っているというイメージは、両者が究極的にはともにゼウスの意志の代行者であることと無関係ではないだろう¹⁵。しかし、これは両神がこの日一日全く中立の立場になったということではない。一対一の対決でヘクトルがアイアスの大岩によって仰向けに倒されると、アポロンはすかさず立ち上がらせてやるのである (272)。

第 8 巻ではゼウスが神々の会議を開き、神々の人間界の戦いへの介入を禁じる (10-16)。それでも 311 行では、ヘクトルを狙ったテウクロスの矢をアポロンが外させる。この時神がどこにいるかは明らかにされないが、おそらく「遠隔操作」であったろう。ヘレとアテネもゼウスの言いつけに背いて天の門から戦車を繰り出そうとするが (392-393)、ゼウスの命を受けたイリスに止められて (409-411) 引き返す (435)。

¹⁴ Dietrich (1979) 138 が指摘するように『イリアス』においてトロイアの城内に神殿を持つ神々はアテネとアポロンのみであり、これは両者の都市の守護者としての役割を反映している。

¹⁵ 櫨の木がこの場面にとりわけ相応しいことについては、Wesselmann (2023) 32、22 行への注を参照。Erbse (1980) 271 は、アテネとアポロンが禿鷹の姿を取るのは死骸が多く散らばる戦場の近くで不自然に見えず、また天からではなく地上で見物することによってその出来事に特別な意義 (eine besondere Weihe) を付するためであるとする。

第 9 巻ではアテネもアポロンも活躍しない。過去にアポロンがアルキュオネをさらった逸話が、ポイニクスがアキレウスに話す喩え話の中に出てくるのみである (560-564)。

第 10 巻ではアテネがディオメデスとオデュッセウスの夜の冒険を援助する (274-275, 295, 366-367, 482, 507-508)。アポロンもそれを見ていてヒッポコオンを起こし (515-518)、トロイア方に夜襲の被害を知らせる。

第 11 巻はアガ멤ノンのアリスティアであり、アテネとヘレはオリュンポスから雷を鳴らしてアガ멤ノンに榮譽を与える (45-46)。アテネはさらにオデュッセウスの傷を軽くしてやるが (438)、ゼウスの言いつけを守って地上の戦場には出向かない。この巻ではアポロンの活動は言及されない。

第 12 巻は船陣の囲壁での戦いの巻であるが、アポロン、ポセイドン、ゼウスが、アカイア人が神々に犠牲を供えることなく築いた防壁を戦争後に跡形もなく壊すことになっている事が言われる以外は、アポロンの活動についての言及はない。アテネも全く登場しない。普段ならばトロイア方の戦士はアポロンが守るところだが、402-403 行においてはゼウス自らが息子サルペドンを遠隔で守ってやっている。これは第 16 巻で彼の運命の時が来て、ゼウスさえも守ってやれなくなるのと対照をなしている。

第 13 巻から第 15 巻にわたる船脇での戦いに継続して介入している神はポセイドンだけであることは先に述べたが、(そして第 14 巻のヘレの計略によってゼウスの注意が戦場を離れている間に大いに活躍する)、彼が海に退いた後 (15.219) アポロンとアテネも海辺の戦いに関与する。アポロンはイダ山に赴いてゼウスの命令を受け、海辺の戦いに参加し (15.220-235)、トロイア軍を励まし、アカイア人の防壁を壊し、ヘクトルを援助し (15.236-366)、ポリュダマスを守る (15.521-522)。一方アテネも海辺でアカイア軍を間接的に支援し、彼らの目から霧を取り除く (15.668-670)。

第 16 巻ではアテネは姿をひそめ、アポロンの活躍が目を引く。まずアポロンはグラウコスの祈りを聞いて傷を癒し (16.527-529)、次にはゼウスの命により、パトロクロスに討たれたサルペドンの遺体を洗い、アンブロシアを塗り、神々の衣を着せて (676-680)、眠りの神と死の神に故国のリュキアへ運んで行くよう手渡す。こうして癒しの神の側面を見せた後、こんどは死をもたらす神としてパトロクロスに対抗する。アポロンは三度までもトロイアの城壁に登らんとしたパトロクロスを押し返し (702-712)、ついにはパトロクロスを手打ちして武装を解き、力を奪ってエウポルボスとヘクトルの楽な対戦相手とする (791-806)。

第 17 巻でもアポロンは盛んにトロイア方の加勢をするが (71-82, 118, 322-332, 582-90)、アテネも負けておらず、ゼウスのアカイア勢を励ますようにとの命を受けて、「ゼウスの懸ける虹のように」 (547-548) 天から下り (544-546)、パトロクロスの遺体を守るようメネラオスを激励する (551-573)。ここではゼウスの意向 (νόος) がすでに変わったと言われている (546)。

続く第 18 巻、第 19 巻では反対にアポロンが姿をひそめ、アテネのアキレウスへの支援が目立って来る。第 18 巻ではアキレウスが武具なしでもトロイア軍を脅かして退却させられるよう、アテネは彼の肩に、ゼウスの権威の象徴であるアイギスを懸け¹⁶、その頭の周りに黄金の雲の輪をあしらい、それに火をつけ燃え立たせる (18.203-206)。そして雄叫びを上げるアキレウスと一緒に叫び、トロイア軍を混乱に落とし入れてアカイア軍の陣地から追い返すのを助ける (18.217-218)。第 19 巻ではパトロクロスの死を悼むあまり飲まず食わずでいるアキレウスに、ゼウスの命によりアテネが神々の飲食物であるネクタルとアンブロシアを与えて空腹にならないようにする (19.350-354)。

第 20 巻、第 21 巻は神々の戦いの巻であるが、アテネとアポロンは直接には争わない。第 20 巻ではアポロンは戦場へ復帰したアキレウスに対してアイネイアスをけしかけ (79-85)、逆にヘクトルにはアキレウスと戦うなどと言う (375-378)。一方アテネは二人の最初の対決において、ヘクトルの槍をアキレウスからそらしてやり (20.438-440)、アキレウスの方がヘクトルに攻めかかろうとするとアポロンがヘクトルをさらって深い霧で隠してしまう (443-444)。

第 21 巻では、アテネはアレスと対決して巨岩で打ちのめして楽々と負かす (391-415)。第 5 巻でもディオメデスをけしかけてアレスに傷を負わせているアテネだが、ここでは直に自分の力の優位を誇示するのである。(ただし、第 18 巻のアキレウスの楯の中では (18.516) アレスとアテネが並んで軍勢を率いていることから、二神は軍神として対立するばかりでなく協力する可能性があることも窺える。) 一方アポロンはポセイドンと対峙したものの、叔父と戦うことを恥として退く (21.461-469)。戦いのあと、外の神々はオリュンポスに戻るが (518-519)、アポロンは「運命を超えて」 (ὑπέρμορον) 攻め落とされる事がない

¹⁶ この作戦はゼウスの知らぬ間にヘレがオリュンポスからイリスを送ってアキレウスに指示するものであるが (18.166-168)、人間としてただ一人アイギスをまといわされることからしても (Coray (2018) 88)、*Διὶ φίλος* (ゼウスに愛されたる) という形容句 (18.203) が用いられていることからしても、この場面のアキレウスはヘレとアテネのみならずゼウスからも (暗黙の?) 支持を受けているように思われる。アイギスがゼウスの権威を象徴することについては Yasumura (2011) 93-94 を参照。

ようにトロイアの市へ行き¹⁷ (515-517)、トロイア人を支援する (538, 545-546, 596-597)。救い出したトロイア人のアゲノルの姿を取って (600) アキレウスをおびき寄せるところで第 21 巻が終わり、それをアキレウスに明かすところで第 22 巻が始まる (22.8-13)。

第 22 巻では、ヘクトルがアキレウスに追われているのを神々がみな天上から眺め¹⁸ (166)、ゼウスはヘクトルを哀れみ救うことも考えるが、アテネの抗議に答えて本気で言っているのではないと言う (167-185)。ゼウスの許可を得たアテネはアキレウスを援助するべくオリュンポスから飛び降りる (186-187)。一方アポロンはヘクトルへの「最後の神護として」 (203) 足を速くしてやり、さしも俊足のアキレウスにも捕まえられないようにする (202-203)。しかしゼウスの黄金の秤でアキレウスとヘクトルの命が計られ、ヘクトルの方が下がり (202-212) 彼の運命の時が来ると、アポロンはヘクトルの側を離れて去って行く (213)¹⁹。あとはアテネの好き放題である。まず最初に、ヘクトルの弟ディポボスに変装してヘクトルを油断させ、アキレウスとの致命的な決闘に誘い込み、次にアキレウスの槍がヘクトルを射ち損ねた時は、それを返してやる (214-277) など、不公平極まりない助力を与えてヘクトルを討ち取らせる。

第 23 巻でもアポロンとアテネのそれぞれひいきの英雄たちへの支持は続く。アポロンは死んでもヘクトルのことを見捨てず、天から黒雲を下ろして遺体を覆い、干からびないようにする (189-191)。パトロクロスの葬送競技にも両神が介入し、その葛藤が戦車競走に見られる。アポロンが (トロイア人アイネイアスから奪った馬を駆る) ディオメデスの鞭をたたき落として遅らせようとする (383-384)、アテネがすぐそれを拾って返してやるのである (388-390)。他方、徒競走では、アテネがお気に入りのオデュッセウスの祈りを聞き入れて手足を軽くしてやる一方 (771-772)、ライバルのオイレウスの子アイアスは転ばせて (774-775)、後者はアテネがいつも母親のようにオデュッセウスに付き添っている、とぼやく (782-783)。弓術の神でもあるアポロンは、弓競技で生贄の奉納を約束しなかったテウクロスの矢を的から外させ (862-865)、生贄を約束したメリオネスには的を射させる (870-873)。

¹⁷ Du Sablon (2014) 77 が指摘するように、これは 20.30 におけるゼウスの懸念を反映している。

¹⁸ 22.166 と 24.23 における「観客」としての神々の役割については、Myers (2019) 179-180 を参照。

¹⁹ ゼウスの黄金の秤と運命の関係については Yamagata (1994) 117 の注 24 を参照。

第 24 巻にもアテネとアポロンの間接的な対立が見られる。アポロンがヘクトルの遺体をアイギスで覆って守る一方²⁰ (18-21)、アキレウスによるヘクトルの遺体の虐待を案じた他の神々の、ヘルメスにそれを盗みださせようかという提案 (24) に、ヘレ、ポセイドン、アテネだけが反対する (25-26)。それにアポロンが抗議すると (32-54)、ヘレが反論し (55-63)、アポロンもアキレウスの両親のペレウスとテティスの結婚式に豎琴を持って行ったのではないかと言う (62-63)。そこでゼウスがとりなし、テティスを呼び出してアキレウスを説得させるということになる (64-76)。アテネの『イリアス』における最後の出番は、テティスがオリュンポスへやって来た時にゼウスの側の自分の席を譲ることである (100)。アポロンの最後の「出番」は、アキレウスがプリアモスに語る、ニオベの 12 人の子をアポロンとアルテミスが殺したという話である (605-606)。

5. 結論

アキレウスの楯 (18.483-608) とポセイドンの語る三兄弟の世界の分割 (15.189-193) の語りから、『イリアス』におけるホメロスの世界は人間の目に見える天、大地、海のみならず、ハデス、タルタロスを含む地下の冥界も視野に含めていることがわかる。主たる神々の動きを見るとゼウスとヘレを中心とするほとんどの神が天界・オリュンポスを住居とするか訪れるかしており、人間の住む地上や海辺も訪れている。海の神であるポセイドンとテティスはさらに海中、陸地、天上を自由に行き来する。そして冥府を常のすみかとするハデスを除くと、ほとんどの神が冥界を訪れることがないのに反して、テティスは過去にはゼウスを助けるために冥界へ行き、ペレウスと結婚して地上に住み、トロイア戦争中の現在は息子アキレウスを助けるために海から海辺へ、海辺から天上へと動きまわり、出来事の展開に大きな影響を及ぼしている。また、ゼウスは過去には地上をしばしば訪れて人間と親密な関係を持ち、子も多く設けたが、物語の進行中の現在は天界に留まって、オリュンポスないしイダの高みから世界の隅々の出来事に影響を及ぼす。その影響力は武器とする雷電のみならず、自分の代理とする神々、特にアテネとアポロンによってより増幅されている。

²⁰ これは 18.203-206 でアテネがアキレウスをアイギスで覆ったのに対応する、ゼウス承認の下の恩恵であると解釈できる。アポロンは 15.307-311 でヘクトルとトロイア軍を援助するときにもアイギスを手にしていた。Richardson (1993) 275、18.18-21 への注参照。

ただし、トロイアの戦場ではアテネはアカイア軍、特にアキレウスを、そしてアポロンはトロイア軍、特にヘクトルを支持する役割を担っているため、両者の働きはおのずと対立しがちになる。アテネはほぼ常にオリュンポスを本拠として、ゼウスやヘレの命を受けてはアカイアの英雄たちを援助するべく地上に降りていくが、アポロンは『イリアス』の物語中ほとんどの場合トロイア城内のペルガモスを本拠地としてそこからトロイア軍を助けに出かけるという、異例の動きを見せる。これは、よく言われる「近くの神」としてのアテネ、「遠くから働きかける神」(ἐκάρργος, ἐκατηβόλος) としてのアポロンというコントラスト²¹と逆さまで、アポロンも実は味方する人間たちを身近に見守り、アテネと負けないほど親密に援助する神でもあることを示しているように思われる。

ただしアポロンも第1巻と第24巻では他のオリュンポスの神々と暮らし、豎琴を奏でて楽しませる音楽の神としての一面も垣間見させる。そうして対立しがちなアテネとアポロンだが、両者ともゼウスの権威を象徴するアイギスを用いてそれぞれの保護する英雄、アキレウスとヘクトルに名誉を授けることができる。そして第7巻では異例のことに、禿鷹に変身してゼウスの聖なる櫪の木に仲良く並んで英雄たちの決闘を見物する。アテネは同じ兄弟でもアレスに対しては遠慮会釈なく武力で対抗することもあるが、アポロンに対しては援助する英雄を通して間接的に挑戦することはあっても、直接に悪態をついたり暴力をふるったりすることはない。アポロンはアカイア勢を支持する叔父ポセイドンと争うことを拒み、神々の戦いの後ではトロイアが「運命を超えて」陥落することがないように、と守る。あくまでトロイアが滅びる運命を変えるのではなく、それが定められた時に起こるように他の神々、特にアテネと協力して同じ目標に向かって行動している、と見ることができる。アテネとアポロンはゼウスの計画の表と裏、あるいは右腕と左腕のように連動して、出来事を運命の定めた結末へと進めていく役割を担っていると言えよう。

²¹ アテネを「近くの女神」(Goddess of Nearness)、アポロンを「遠くの神」(God of Afar) とする見解については、Burkert (1985) 141, 148 及び Otto (1954) 64 を参照。

参考文献

- Albinus, L. (2000) *The House of Hades: Studies in Ancient Greek Eschatology*, Aarhus: Aarhus University Press.
- Alden, M. (2000) *Homer Besides Himself: Para-Narratives in the Iliad*, Oxford: Oxford University Press.
- Alden, M. (2011) 'Shield of Achilles' in Finkelberg: 793-796.
- Burgess, J. (1995) 'Achilles' Heel: The Death of Achilles in Ancient Myth' in *Classical Antiquity* 14(2): 217-43.
- Burgess, J. (2009) *The Death and Afterlife of Achilles*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Burkert, W. (1985) *Greek Religion*, tr. Raffan, J., Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press (originally published in German in 1977 as *Griechische Religion der archaischen und klassischen Epoche*).
- Clay, J. S. (2011) 'Zeus' in Finkelberg: 952-954.
- Coray, M. (2018) *Homer's Iliad: The Basel Commentary Book XVIII*, Millis, W. and Strack, S. (tr.) and Olson, S. D. (ed.), Boston and Berlin: De Gruyter.
- Dietrich, B. C. (1979) 'Views of Homeric Gods and Religion' in *Numen* 26: 126-151.
- Dova, S. (2012) *Greek Heroes in and out of Hades*, Lanham, Md and Plymouth: Lexington Books.
- Du Sablon, V. (2014) *Le système conceptuel de l'ordre du monde dans la pensée grecque à l'époque archaïque: Τιμή, μοῖρα, κόσμος, θέμις et δίκη chez Homère et Hésiode*, Namur: Peeters.
- Edwards, A. T. (1985) 'Achilles in the Underworld: *Iliad*, *Odyssey*, and *Aethiopis*' in *Greek, Roman and Byzantine Studies* 26: 3, 215-27.
- Erbse, H. (1980) 'Homerische Götter in Vogelgestalt' in *Hermes* 108: 259-274.
- Finkelberg, M. (ed) (2011) *The Homer Encyclopedia Volume III R-Z*, Chichester: Wiley-Blackwell.
- Guthrie, W. K. C. (1950) *The Greeks and their Gods*, London: Methuen.
- 松平千秋 (訳) (1992) 『ホメロス：イリアス』 (上) (下)、東京：岩波書店。
- 水島陽子 (2019) 「アキレウスの楯」川島重成・古澤ゆう子・小林薫 (編)、『ホメロス『イリアス』への招待』第5章 419-447. 東京：ピナケス出版。
- Myers, T. (2019) *Homer's Divine Audience: The Iliad's Reception on Mount Olympus*, Oxford: Oxford University Press.
- Nagy, G. (2003) *Homeric Responses*, Austin: University of Texas Press.
- Otto, W. F. (1954) *The Homeric Gods: The Spiritual Significance of Greek Religion*, tr. Hadas, M., New York: Pantheon (originally published as *Die Götter Griechenlands: Das Bild des Göttlichen Geistes* in 1929).

- Richardson, N. (1993) *The Iliad: A Commentary: Volume VI: books 21-24*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Scodel, R. (2007) 'The Gods' Visit to the Ethiopians in *Iliad* 1' in *Harvard Studies in Classical Philology* 103: 83-98.
- Slatkin, L. M. (1991) *The Power of Thetis: Allusion and Interpretation in the Iliad*, Berkeley, Los Angeles and Oxford: University of California Press.
- Slatkin, L. M. (2011) *The Power of Thetis and Selected Essays*, Washington, D. C.: Center for Hellenic Studies.
- Taplin, O. (1980) 'The Shield of Achilles within the *Iliad*' in *Greece & Rome* 27: 1-21.
- Taplin, O. (1992) *Homeric Soundings: The Shaping of the Iliad*, Oxford: Clarendon Press.
- Wesselmann, K. (2023) *Homer's Iliad: The Basel Commentary Book VII*, Millis, W and Strack, S. (tr.) and Olson, S. D. (ed.), Boston and Berlin: De Gruyter.
- Yamagata, N. (1994) *Homeric Morality*, Leiden, New York and Köln: E. J. Brill.
- Yamagata, N. (2020) 'Thetis: The Goddess Between Four Worlds' in Christopoulos, M. and Païzi-Apostolopoulou, M. (eds.), *The Upper and the Under World in Homeric and Archaic Epic: Proceedings of the 13th International Symposium on the Odyssey, Ithaca, August 25-29, 2017*, 11-30, Ithaca: Centre for Odyssean Studies.
- Yamagata, N. (2023) 'Thetis and the Shield of Achilles – Reading the *Iliad* with Auden' in Paprocki, M., Vos, G. and Wright, D. J. (eds.), *The Staying Power of Thetis: Allusion, Interaction, and Reception from Homer to the 21st Century, Trends in Classics Supplementary Volumes 140*, 395-410, Berlin and Boston: De Gruyter.
- Yasumura, N. (2011) *Challenges to the Power of Zeus in Early Greek Poetry*, London: Bristol Classical Press.

Homer's Cosmology:
On the Rivalry between Athena and Apollo in the *Iliad*

Naoko YAMAGATA

Homer's world in the *Iliad* encompasses not only the sky, the earth and the sea which are visible to the human eye, as narrated in the scenes on the shield of Achilles (18.483-608), but also the underworld, as can be gathered from the tale of the division of the world told by Poseidon (15.189-193). This essay attempts to map the structure of this universe by tracking the movements of the gods rather than those of human beings who are earth-bound. Most of the gods, led by Zeus and Hera, have either made Olympus (heaven) their home or at least visit there, and also visit the earth and seaside where humans live. Poseidon and Thetis, the gods of the sea, also move freely between the sea, the land, and Olympus. On the other hand, while most gods never visit the underworld (except Hades who lives there), Thetis went to the underworld to help Zeus in the past, lived on earth with Peleus for a while and now, during the Trojan War, moves between the sea, the seaside and Olympus to help his son Achilles. By doing so Thetis influences the course of events in the poem. Zeus, the ruler among the gods, stays in heaven and influences the events of the whole world from Olympus or Ida. He rules the world not only by his own power, but also through other gods as his agents, especially Athena and Apollo. As Athena is responsible for supporting the Achaeans, especially Achilles, and Apollo for supporting the Trojans, especially Hector, rivalry often arises between the two and there is a distinct difference in their locations and movements. Athena is based at Olympus and descends to the earth to help the Achaeans, while Apollo often uses Pergamos in the city of Troy as his base and goes to help the Trojans from there. However, in Books 1 and 24, we also get a glimpse of Apollo living on Olympus with other gods and entertaining them with his music. Both Athena and Apollo are authorised to use the aegis, a symbol of Zeus' authority, to honour their protégés, Achilles and Hector

respectively. Athena and Apollo do not directly confront each other, but only indirectly through the heroes whom they support. Moreover, Apollo defends Troy only to prevent it from falling 'beyond fate', rather than trying to change its fate itself. Apollo can be seen to be working with Athena to achieve the same goal, to ensure that Troy will fall at the right time. Athena and Apollo are like two sides of Zeus' plan or his right and left arms, to guide events to their predetermined conclusions.